

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

蕾のまま

松任中学校二年

小正 こしょう

侑妃乃 ゆきのの

僕は窓の鍵に手を掛けた。少しさびれた鍵が、僕を拒むようにキィと小さくないた。

月明かりが窓の形を型取って、物の少ない部屋の壁をぼんやりと照らす。不意に夜風がのびた前髪を揺らす。

僕は手を開く。赤いチューリップの飾りがついた、小さなペンダント。月の光を返して金色のチェーンがきらめいた。

無邪気であどけなく、わずかに温かみを感じた。

手にうつすらとチェーンの赤い跡ができていた。

眺める度に、沸き上がってくる、あつてはならない感情に惑わされそうになって、僕は怯えるように布団の温もりに助けを乞う。

「お兄ちゃん！」
突然背後から声をかけられて、反射的にビクツとしてしまう。

「愛咲、どうした？」
愛咲。僕の妹。いつも周りの空気を和ませてくれる。いわゆるムードメーカーというところだろうか。

いつでもくりくりした大きな瞳をきらきらさせて懲りずに構ってくる。その愛くるしい笑顔が僕に元気をくれる。最早生き甲斐という位に。愛咲の瞳が僕を真っ直ぐに見つめる。

「あのね、愛咲、はーとの雲みつけちゃった。ほら、あそこ。今日なんか良いことあるかな。」
「そうだな。」

そう言つて愛咲の柔らかい頭を撫でる。愛咲は幸せそうな笑顔を僕に見せた。

この笑顔を守りたい、守っていかねばならない。そんな気持ちはいつからか僕の心に芽を出した。

僕が学校から帰ると、僕を出迎えてくれる筈の愛咲が居なかった。ランドセルを背負ったまま、母さんに声をかける。

「母さん、愛咲は？」
「え、居ない？早苗ちゃん家からまだ帰ってきてないのかな。まさか、何かあったんじゃない？」

「ちよつと探してくる。愛咲が帰ったら連絡してっ。」
居ても立ってもいられなくなった僕は迷わず家を飛び出した。

辺りは暗くなり始める。僕の心を嫌な予感が擦れていく。

どうか無事であつて欲しい。ただひたすらそれだけを想つて嫌な予感を掻き消す。

「愛咲ーっ。」

これでもかと声を張り上げて名前を叫びながら、大通りに沿って走り続ける。

半泣になりながら、除々に車が多くなっていくのを感じる。もしかして、愛咲は…。いや、そんなわけない、愛咲は無事に決まっている。大丈夫だ。

僕は残りわずかな体力を振り絞って再び走り出す。

辺りは、もうすっかり暗くなって、蛍光灯が点き始めていた。

「愛咲あーっ。」
そのとき、僕の耳に声が届いた。毎朝欠かさず聞いている声。心細く、喪失感に苛まれたような声。何処か心が温かくなる声。

「お兄ちゃんっ。」
大通りの向こうに、泣きじゃくる愛咲が居た。

愛咲は僕の姿を見つけると、安心したように、目を潤ませて笑った。僕もそんな愛咲にホッとして、微笑んだ。

心を縛っていた緊張の糸が緩んだ。その時初めて、息が上がっていたことに気がついた。

そんな間に、横断歩道は青になった。

愛咲は一目散に僕に向かって駆け出した。今、ちゃんと右と左を確かめてから渡っていたら、何か変わっていたかも知れない。次の瞬間、僕に向かって走って来る愛咲に勢いをつけたトラックが迫っていた。

僕は愛咲を守りたい一心で、愛咲のもとへ走ろうとした。でも、もう体力の限界だった。足下がフラついて転んでしまった。僕は反射的に目をつむった。

刹那、大きなクラクションが響きわたった。

目を開くと、愛咲は道路の真ん中に投げ出されるように倒れていた。

はっとして僕は愛咲に駆け寄った。

「愛咲っ。」

呼びかけてみるが返事はもう返ってこない。

愛咲の手は除々にいつもの温かさを失っていった。

僕がああの時……。その場に居たのに、守れた筈なのに。

僕は……。何もできなかった。

嫌悪感と後悔に押し潰されてしまいそうになる。

強く握りしめた手の甲に、幾つもの雫が零れる。

母さんの臉は、真っ赤に腫れていた。僕もきつと、こんな風に腫れているんだろうか。

母さんは黙ったまま、僕に手を差し出した。赤いチューリップのペンダント。

僕が愛咲の誕生日にプレゼントしたものだ。愛咲は、いつも肌身離さずに、大切にしてくれている。

僕はそれを右手に強く握りしめる。

ずっしりと重く、どこか生温かった。

僕は一人、部屋に閉じ籠もって泣いた。もう枯れたと思っていた涙は、止まることを知らないまま。体の中から水分が抜けていくのを感じる。

それでもなお、僕は涙を流し続けた。

再び嫌悪感と後悔が僕を深い深い闇の海に突き落とそうとする。

僕は、必死だった。

か細く、触れたらすぐに粉々になってしまうような弱い心。それを何とかつなぎ止めようと必死だった。

愛咲に僕は、どれほど救われてきたのか、解らない。いつだって愛咲に頼って、縋って本当の心を誤魔化してきたんだ。

もの凄く辛い。苦しい。

：愛咲、戻って来てよ。また僕を助けてよ。

愛咲が居てくれたから、僕は今まで生きてこれたのだと。愛咲が僕のたった一つの生き甲斐だったのだと。

愛咲が居ないと、何もできないなんて。自分の無力さを痛感した。

この世界で最も苦しい痛み。それは、心の痛み。生きる意味を失った痛み。僕は今、確かに感じた。

どれ程の時間が経ったのだろう。気がつけば、もう夕方になっていた。半開きのカーテンから、沈みかけた、燃えるように赤い夕焼けが見えた。目が眩むように、西日が僕に何かを伝えるように、強く美しく煌めいていた。

不意にお腹が鳴った。どんな時でも、お腹が空く。あたり前だ。でも、その些細な事実さえもが僕を空しくさせる。

愛咲は、もう何にも口にするのができないのに。人間の本能は何て無慈悲なんだろう。

台所には、僕の分の食事が、ラップをかけて置いてある。母さんは仕事に行ったようだ。

母さんも僕と同じ、いや、僕以上に辛く苦しい筈だ。母さんは僕とは違う。泣き崩れて何もできない僕とは違う。母さんは強い。母さんには強い覚悟があるから。

やっと気がついた。僕は独りじゃない。僕等人間は、一人で生きられない、弱い生き物だから。僕が今生きているのは、母さんが生きているから。じゃあ、こんなに情けない僕だけど、母さんや誰かの生きる力になれているのかな。

心の中の大きな穴が少し埋まったような気がした。

僕の父さんは、愛咲が生まれてすぐに交通事故で逝ってしまった。僕が小学生になったばかりのときだ。母さんは、幼い僕等を自分が守ってみせると心に誓ったそうだ。

僕は、母さんを信頼している。母さんの傍に居るだけで安心する。僕も母さんみたいに人を安心させられる人間になりたい。

父さんがいなくなつて、僕はただ泣くだけで何もできないでいた。幼かったとはいえ、母さんには申し分なかったと思う。

母さんがそんな僕に架けてくれた言葉を、今も覚えている。

「辛い事や苦しい事があつたとき、泣いたって良い。でもそれは一日だけ。次の日からは自分の大切なものを守るために行動しなければならぬ。」

この言葉は母が今まで大切にしてきた言葉。この言葉が、不思議と僕の背中を押してくれた。

すっかり気温が上がって、今日もあたたかく、柔らかい光が僕を包み込む。透き通った朝の空気を吸い込んで、重たいドアを開く。

春風の中で手を伸ばして何もつかめないまま、ただ前にだけ進む。

もう迷わない。もう泣かない。いつかの僕に別れを告げて、今を大切に積み重ねていくんだ。これが僕の生き方なんだ。

この道の先で、真っ花なチューリップの花が蕾のまま、花開く刻を待ち続けている。

